

煉瓦基礎

二葉館の1階廊下を歩いていると、和室前にガラス張りの床面が現れます。「なんだろう、床下に一体何が？」と覗き込むお客様をよくお見かけします。そんな時、「ここは創建当時の基礎の様子を展示しております」と説明すると、皆さん感心して興味深そうにさらに床下をご覧になります。

実はこの建物の基礎は、煉瓦造部分とコンクリートの布基礎、切石の布基礎の3種類が確認されており、ここでは煉瓦造部分を展示しています。



1階廊下

底盤部分は煉瓦1枚半積み、立ち上がり部分は煉瓦1枚積みという構造になっています。また、この近くに展示している配電盤の床下からも、煉瓦の独立基礎を見ることが出来ます。



煉瓦独立基礎(配線の奥)



外基礎展示

他にも、駐車場奥の書庫棟北側に、煉瓦製石張りの布基礎と煉瓦製独立基礎がオブジェのように立っています。奥に地下室の煉瓦壁も置かれています。よく見ると煉瓦と煉瓦の間にアスファルト層が設けられ、防水対策がなされていたことが分かります。

二葉館には貞奴の孫である川上初氏から寄贈されたゆかりの品が多数あります。今回は普段は見えない展示品の裏側や非公開の寄贈品についてご紹介いたします。

IRODORI いろどり

ノリタケ製の食器

1階の和室(展示室3)にあるカップ&ソーサーは、貞奴が日本陶器会社(現ノリタケカンパニー)に注文して作らせた食器だと言われています。若草色のポーターを金線で縁取りした図柄で、カップの側面とソーサーの上部に「流水と紅葉」のマークが入っています。このマークは貞奴が好んで使用したもので、着物や照明のかさ(1階事務室前の廊下)にも用いられています。裏側には一九一一年頃から一九四〇年頃まで国内用として使われた「ヤジロベエ」と言われるバックスタンプが入っています。バックスタンプとはその器の情報を記載しているもので、器の出所を確かめたり、製造年代を把握するための重要な刻印です。「RC」は「Royal Crocker」(高級磁器)を、「ヤジロベエ」は「バランスのとれた経営を意図したものだ」です。



流水と紅葉



大皿



バックスタンプ



カップ&ソーサー

このバックスタンプの色はグリーンですが、他にマロンやブルーのものや、また「日本陶器会社」や「Nippontoki Kaisha」の印字のないバリエーションもあるそうです。同じ図柄で横幅約60cmの大皿(非公開)もあり、同じように上部には「流水と紅葉」のマーク、裏側にも同じ「ヤジロベエ」のバックスタンプが入っています。

当時の二葉御殿は財界人や著名人のサロンであったと言われており、毎日のように福沢桃介(電力王といわれた貞奴のビジネスパートナー)の仕事関係の客人が訪れていたそうです。そうした客人のもてなしの為に自分のマークを入れた食器類を作らせたのではないかと考えられています。



文化の番外編 5 さんぽみち

ばんしょうえん 「萬松園」

今回は貞奴が晩年に過ごした別荘「萬松園」について紹介します。

ここは、貞奴が鶴沼に建立した寺、「貞照寺」参拝の折に滞在する別荘として、その門前に昭和四年に建てられました。「萬松園」の名は、夫川上音二郎と共に欧米興行で大成功を収めて帰国した直後の明治三十五年に茅ヶ崎に構えた邸宅「萬松園(伊藤博文によつて名付けられたとされる)が由来のようです。

音二郎の死後、桃介と再会した貞奴は、茅ヶ崎の「萬松園」を売却、名古屋に「二葉御殿」を建てました。その後「二葉御殿」を売却した資金など私財を投じて建てたのが、貞照寺と萬松園です。

敷地面積五〇〇坪、建坪二五〇坪、二階建てで部屋数二十五。一部屋として同じ意匠のないう趣を凝らした内装は、日本中から集められた資材を用いて、東西の名工の手によつて造り上げられました。社交を目的のひとつとして建てられた二葉御殿とは異なり、純粋な私邸



仏間の天井



書院造りの和室

として建てられました。女性ならではのこだわりで満ちたこの別荘は、数奇屋造りの落ち着いた佇まいの外観で屋根は鉄瓦です。格式のある玄関から中に入ると、まずは書院造りの和室があります。貞奴が得意とした舞踊「娘道成寺」の鐘をデザインしたと思わせる火灯窓が配されています。続いて、天井に節材をユニークに活かした和室、中国風の部屋、天井画を配した仏間の襖には菩提樹が描かれています。上品な素通しのステンドグラスをはめたサンルーム、茅葺屋根を乗せた田舎風の部屋の棟へと続き、その離れには二葉御殿にあった茶室が移築されています。

一時取り壊しの危機もありましたが、平成十六年に「(株)創寫館」が受け継ぎ、老朽化した部分を改修しました。平成十九年には各務原市の指定文化財に指定されています。現在は創寫館の結婚式場「迎賓館サクラヒルズ川上別荘」の敷地内にあります。通常は一般公開されておりませんが、イベントの際に見学できる場合もありますので、機会があれば訪れてみてはいかがでしょうか。

from Archive 書庫棟から 「あじくりげ」



創刊は一九五六年(昭和31)6月、発行は名古屋タイムズ社(その後「東海志にせの会」発行)。翌年には地下鉄東山線が部開通し、戦後の復興が進む高度経済成長の初期に「あじくりげ」は生まれました。記念すべき第1号には、尾崎士郎、岡戸武平、江戸川乱歩など著名な文士らが筆を執り、画家の杉本健吉が表紙絵を飾りました。これらの執筆者からみると、単なるグルメ小冊子ではなく、「食」を通じた粋な文芸冊子であることが分かります。

発行以来、郷土の人々に選られた食文化を提供し続けてきましたが、「東海志にせの会」の会員数の減少とともに発行の継続が困難となりました。さらに、グルメ雑誌やインターネットの普及などの影響もあり、惜しまれつつも60周年の節目に終刊が決まりました。

この度、編集者のご厚意により、文化のみち二葉館へ大半の冊子と資料が寄贈されました。それらは現在調査中ですが、近々皆様にご紹介していきたいと思っておりますので、楽しみにしててください。

皆さん「あじくりげ」をご存知でしょうか。東海地方の老舗の料理店や菓子店などに置かれていた、B6サイズの月刊小冊子のことです。「食」に関する様々なコラムやエッセイなどが書かれた、読みごたえのある冊子でしたが、残念ながら昨年5月号(通算693号)を以て、60年の歴史に終止符が打たれました。



「あじくりげ」